

## 4-4-5.奄美の新メディア事情

宮下 正昭

### New situation of Media in Amami

MIYASHITA MASAOKI

鹿児島大学法文学部

*Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University*

#### 要旨

鹿児島県の奄美大島と徳之島は沖縄県の沖縄本島北部、西表島とともに世界自然遺産の登録を2020年夏にも控えている。2003年、同時に登録候補地になった知床（北海道）は2005年に、小笠原諸島（東京都）は晴れて登録されたから、「奄美・沖縄」は取り残された格好だ。この間、知名度が増した奄美大島に関しては格安航空路線の就航や外国クルーズ船入港などで観光客が増加している。さらに陸上自衛隊ミサイル部隊の駐屯も地元誘致の形で結実し、隊員とその家族が暮らし始めた。域外との交流が従来以上に増してきた奄美にとって、足元を見つめ直し、将来を見据えるのに地元メディアの役割は大きいだろう。奄美大島では地元紙2紙のほかにもコミュニティーFMが存在感を示し始めた。島にある4局のありようを追った（2016-17年度）。一方、奄美大島の脇に追いやれてしまっている感のある徳之島では全戸配布のチラシ業者が島民に親しまれている。そんな徳之島のメディア事情（2018-19年度）も探った。

#### 奄美大島のコミュニティーFM

鹿児島県はコミュニティーFMが14局あり、北海道（28局）、沖縄県（19局）、神奈川県（15局）に次いで全国で4番目に多い（2019年6月現在）。出力が基本、20Wに制限され、半径10キロから15キロほどをエリアとする小規模な放送局のため免許も比較的簡易に下りる。県内14局のなかで奄美大島には4局存在し、島の5市町村すべてをカバーしている形だ（中継局も設置）。面積が約710平方キロと比較的大きな離島だが、人口は約6万人の過疎の島で電波を流し続けている。

2007年、島で最初に開設されたのは奄美市拠点の「あまみエフエム」。民間のNPO法人が経営し、島口で語る自主番組を多く持つ。「島ンチュのための島ラジオ」を目指している。2010年の奄美豪雨災害時は、5日間にわたって24時間生放送を続け、存在感を示した。



図1 レトロな駄菓子屋も兼ねた「あまみエフエム」のサテライトスタジオ

行政防災無線の代わりとして同10年に、全国で初めて実質、公設公営で認められた宇検村の「エフエムうけん」、お隣・瀬戸内町では防災無線整備と平行して運営されている公設公営の「エフエムせとうち」が2012年から、そして龍郷町には民間の「エフエムたつごう」が2014年に開局している。

2017年9月、平成の大合併前まで役場があった島内6カ所で合計353人からFM聴取意向調査を実施した。その結果、「週に数回」「毎日」を合わせた聴取率は約65%に上り、コミュニティFMが島発の情報手段として認知されていることが分かった。「あまみエフエム」を中心に、遺産登録問題に関する番組もあり、島民の自然保護に対する意識向上に寄与している。

### 徳之島のメディア事情

奄美大島とともに世界自然遺産登録を目指す徳之島には島発の新聞はない。『南海日日新聞』『奄美新聞』ともに奄美大島の奄美市で刷られ、船便でやってくる。本土の新聞は空輸されてくる。しかし、かつては徳之島発の新聞があった。奄美の本土復帰の年、1953年5月に『南西日報』が創刊（週3回発行）し、その後『徳州新聞』と名前を替え1980年代半ばごろまでは週1回、島で発行、配達されていたようだ。

現在、島発のメディアとしては全戸無料配布のチラシ会社が2社存在する。本業はそれぞれネット事業と不動産業だが、日刊紙の購読世帯が少ないなか誕生した「メディア」をそれぞれ引き継いで運営している。ともにタブロイド判の4ページで、1社はフロントページに島の話も載せている。配布の際は、通常のチラシも折り込まれる。

島内3町で計約60人に行ったアンケートでも、チラシが「便利」という答える人が多かった。島にはそのほか天城町にケーブルテレビがあり、自主チャンネルで自主制作の情報番組も放送されている。アンケートには樟南第二高校の保護者約100人も島のメディア事情について答えてくれた。アンケートの集計・分析、さらには島発の新聞について2019年度内にさらに詳しく調査・分析する予定だ。



図2 徳之島で全戸に配達されているチラシメディア「水曜ガイド」